

Occupy Wall Street

田中 史郎

大震災については、書くべきことが山ほどあるが、『ニッチ』(別冊、第3号)¹⁾や、『ニッチ』(別冊、第4号)²⁾、本学の人社研『人文社会科学論叢』³⁾、でも見解を明らかにしているので、ここでは控えることにする。

¹⁾ 「脱原発メモランダム— 3.11 東日本大震災と科学技術のアポリアー」、別冊『Niche』Vol.3、批評社、2011年7月

²⁾ 「復興のポリティカル・エコノミー」(工藤昭彦・半田正樹氏との鼎談) 別冊『Niche』Vol.4、批評社、2012年1月

³⁾ 「東北復興の視座—社会経済システムの変容と 3.11 東日本大震災—」『人文社会科学論叢』第21号、宮城学院女子大学人文社会科学研究所、2012年3月

では、今年度で記憶に留めておくべき最大の出来事は何かと問われれば、躊躇なく「ウォール街を占拠せよ (Occupy Wall Street)」という、アメリカ発の世界的運動であると言えよう。それは、2011年9月17日にアメリカのニューヨーク・ウォール街から発生した一連の抗議行動であり、全世界に拡大し、最盛期では1千の街で、デモや集会、占拠行動がとられたという。周知のように、ウォール街とは、大手の金融機関が集中する、いわば世界の「富の象徴」ともいえる場所である。そこに多くの人々が老若男女を問わず、自然発生的に結集し、長期に渡って公園などを占拠し続けたのである。

この運動には、「仕掛け人」がいる。それは、カナダの雑誌編集発行者、カレ・ラースン(1942年生まれ)という人物であり、彼が自らのインターネット・サイトに「ウォール街を占拠せよ。9月17日決行、テント持参のこと。」と呼びかけたことから、この運動は始まったという(『朝日新聞』2012年1月1日、以下も同様)。

占拠という行動について、彼は次のように述べている。「ひらめいたのは『アラブの春』から。チュニジアやエジプトの若者たちが、暴力やテロではなく、首都中心部に連日押し寄せることで独裁を打破した。1968年の仏カルチェラタンや東大安田講堂での学生たちの行動を思い出し、頭の中でピカッと回路がつながった。やるなら占拠だと」。そして更に続く。「占拠デモは、初日からもう私の手を離れてひとりで育っていただきました。...リーダーを擁しない。統一目標や綱領もつぐらない。その代わり、参加者全員が平等の発言権を有する...」。このような発言を読み、多くのことを考えたのは私一人ではあるまい。まさに、「あのとき」のイメージがよみがえってくる。

さて、ネットで幾つか探してみると、様々な画像に行き当たる。①は、言うまでもなく、ドル札で口を覆うことによって、金の力で如何に多くの発言や主張を封じ込められてきたかを告発するものだ。②は、「OCCUPY」、つまり、「占拠せよ」と書かれたシャツである。握り拳にはもっと何かメッセージが示されているらしいが、読み取れないのが残念だ。そして、③は実におもしろい。「OCCUPY WALL STREET」の「W」を消し、「S」を加えることによって、「OCCUPY ALL STREETS」となる。つまり「ウォール街を占拠せよ」は、「全ての街を占拠せよ」へと飛躍したのである。運動の拡大と深化とは、そのようなものであろう。



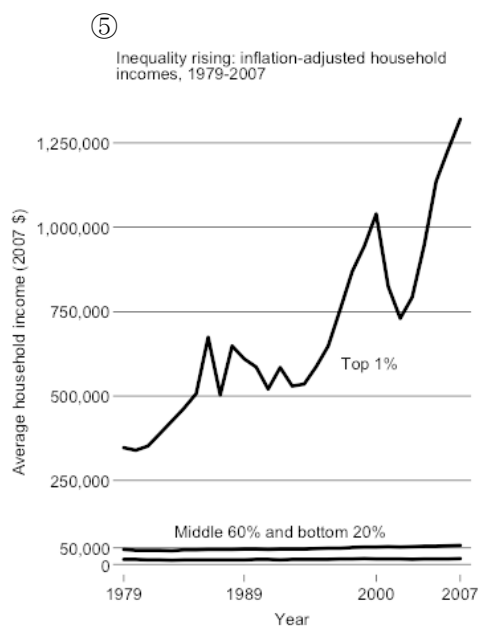
これまで、やや外郭てきなことを述べてきた。問題は、これらの運動が燎原の火のごとく世界中に広がった原因や意味である。

これを端的に示す 2 枚のグラフがある。④は、アメリカの年間収入において上位 1 % 人が占める割合である。これは、上位 1 % 人が 1980 年には 10 % の収入を得ていたが、それが 2007 年には 23.5 % まで増大したことを示している。確かに戦前の 1920 年代のバブル期ではそうしたこともあったが、その後は確実に貧富の格差は縮小してきたにもかかわらず、この 20 年ほどで方向が逆転し格差が開く一方になってきたと言えよう。これは、年収すなわちフローで見たものだが、資産つまりストックで見ると、上位 1 % 人が全米の 40 % を占めているというデータもある。

⑤は、上位の 1 % 層、中位の 60 % 層、そして下位の 20 % 層の年間家計収入の推移を表している。上位の 1 % 層の家計収入は、1979 年から 2007 年に至る 30 年弱の間に、約 35 万ドルから 125 万ドル超に増大しているが、同時期に、中位の 60 % 層と下位の 20 % 層は、それぞれ約 5 万ドルと約 2 万ドルに底這いしている状況である。

これら 2 つのグラフからは、どう見ても上位 1 % の層だけが繁栄を享受していると言わざるを得ない。こうしたことを端的に表現したフレーズが、「We are the 99%」、すな

わち「我々は 99 %だ」である。こうした事態は「1 %と 99 %」というフレーズで表されることもある。



アメリカでは、一般に格差に関しては寛容であり、むしろそれはアメリカンドリームの象徴とも言われてきた。しかし、昨今では、ドリームなどでは済まされないほどに、格差が拡大し、またそれが固定化してきていると言える。そして、こうした状況は、アメリカのみならず、世界中に広がっている。それゆえ、この運動が世界的に伝播したのである。まさに、今日の世界状況の焦点はここにある。そして、スローガンは、「OCCUPY ALL STREETS」である。